

Rubus japonicus として発表された植物について

著者	鳴橋 直弘
著者別表示	Naruhashi Naohiro
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	32
号	1
ページ	55-58
発行年	1984-07-15
URL	http://doi.org/10.24517/00056252



鳴橋直弘* : *Rubus japonicus* として発表された植物について

Naohiro NARUHASHI* : Notes on the Identity of *Rubus japonicus* and Related Nomenclatural Problems

Index Kewensis に *Rubus japonicus* として 3 人の命名者と出典がのっている。それらは LINNAEUS, FOCKE, および LINDLEY and PAXTON である。LINNAEUS および FOCKE について、それらがいかなる植物に該当するかは、後の分類学者が調査し発表している。しかしながら、LINDLEY and PAXTON による VEITCH の *R. japonicus* については、それがどの種に相当するのかこれまで明らかでなかった。私は現在日本産キイチゴ属植物に関する分類学的再検討を進めている。VEITCH の *R. japonicus* がどのような植物に基づいて記載されたものであるか、正確に知る必要があったが、文献等が容易に手に入らなかったため、そのままになっていた。私は 1983 年から 1984 年にかけて、欧州の主要な標本室を訪れる機会があり、イギリスのキュー王立植物園で LINDLEY and PAXTON によって発表された原記載の文献とタイプ標本と思われる標本を見ることができたので、それを合せてここに、これまで *Rubus japonicus* として記載された植物すべてについてその正確な分類学的帰属を報告しておきたい。

標本の観察を心よく許可下さったベルリン・ダーレム博物館 (B)、大英博物館 (自然史) (BM)、キュー王立植物園 (K)、ロンドン・リンネ協会 (LINN)、およびパリー自然史博物館 (P) の各ハーバリウムの Director や Curator に心から感謝する次第である。また、原稿を読んでいただき有用な御意見をいただいた富山大学の河野昭一教授に厚く御礼申し上げます。

(1) *Rubus japonicus* LINN., Mant. 2: 245 (1767)

この植物は日本産のものであり、KLEINHOF の採集品と思われる (清水建美 : 長野県植物研究会誌 1976 による)。LINNAEUS のタイプはいくつかの標本室に厳重に保存されているが、中でも最大かつ最も重要なものは、ロンドンのリンネ協会所蔵のものである。そこにあるこの植物のタイプ標本と思われるものは 1 点あり、花をもつ枝の先端で、2 個体からなる。花弁は 1 枚のみ残り、大きく、単弁のものである。葉や茎は良く保存され、この植物はヤマブキ

である (Fig. 1)。JUEL (1918) は THUNBERG 採集の植物を調査研究し、LINNAEUS の *Rubus japonicus* はヤマブキであると報告している。中井猛之進 (1935) も、これがヤマブキであるとしているが、命名者は小リネウス (リンネの息子) としている。1781 年にリンネの息子は Supplementum Plantarum Systematis Vegetabilium という本の中で、3 つの新種と思われるキイチゴ属植物を報告している。それらは *Rubus microphyllus* ニガイチゴと *R. corchorifolius* ビロードイチゴであり、他の 1 つは *R. japonicus* である。このことが後の人に誤解をまねくことになった。すなわち、これはリンネがすでに記載発表していたのをここで再度とりあげたにもかかわらず、他の 2 種が新発表であったので、これも新発表だと思われたためである。上記した中井もそうであるし、POIRET (1804) の LAMARCK 植物百科辞典にも *Rubus japonicus* LINN. f. となっている。従来の見解と同じく、LINNAEUS の *Rubus japonicus* はヤマブキ *Kerria japonica* (LINN.) DC. である。

(2) *Rubus japonicus* (MAXIM.) FOCKE in Abh. Nat. Ver. Bremen 4: 198 (1874)

FOCKE は MAXIMOWICZ (1872) の記載発表した *Rubus triflorus* RICHARDS. β *japonicus* を別種として母種から独立させ、*R. japonicus* とした。この植物の元の記載である MAXIMOWICZ の holotype は レニングラード科学アカデミー・コマロフ研究所の標本室にあるものと思われるが、今回観察することができなかった。しかし、isotype である須川長之助採集の富士山のもをベルリン・ダーレム植物園・博物館、大英博物館 (自然史)、キュー王立植物園、およびパリー自然史博物館で見ることができた。これらはすべてヒメゴヨウイチゴである。小泉源一は 1909 年にこの植物は *Rubus triflorus* の変種ではなく、*R. americanus* の変種として、組み交えを発表したが、その後、1911 年にこれら 2 種から独立し、別種と考え、その学名に *Rubus japonicus* が使用できないので、*R. pseudojaponicus* の新学名をあたえ

* 〒930 富山市五福 3190 富山大学理学部生物学教室

Department of Biology, Faculty of Science, Toyama University, Toyama 930

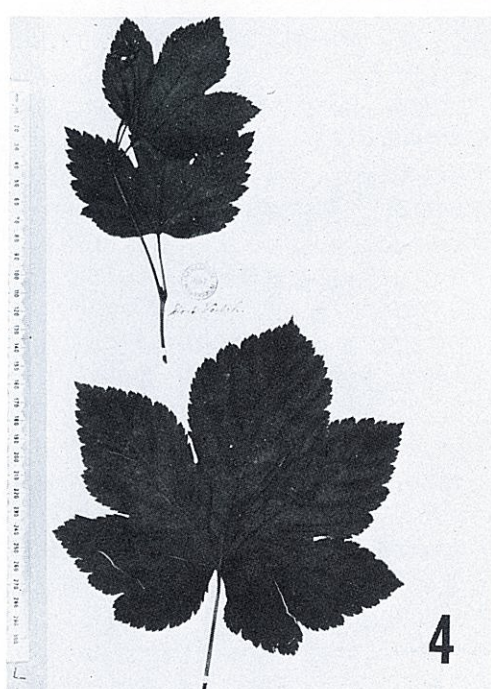
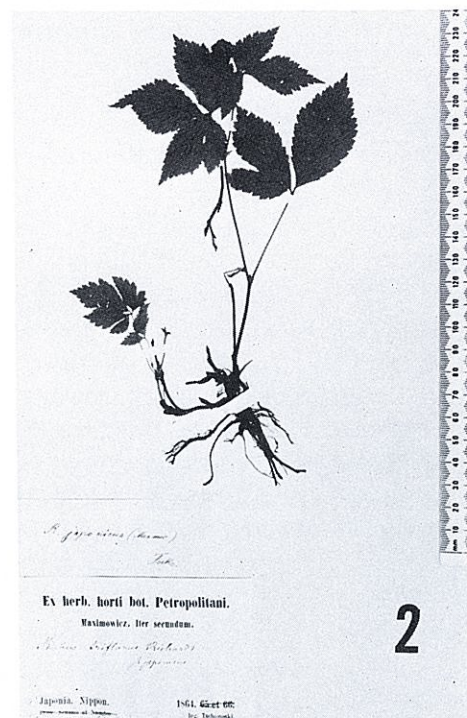


Fig. 1. Holotype of *Rubus japonicus* LINN.
 Fig. 2. Iso-type of *Rubus japonicus* (MAXIM.) FOCKE
 Fig. 3. Lectotype of *Rubus japonicus* VEITCH ex LINDL. et PAXT.
 Fig. 4. Isolectotype of *Rubus japonicus* VEITCH ex LINDL. et PAXT.

ている。従って、Fockeの *Rubus japonicus* は、正しくはヒメゴヨウイチゴ *R. pseudojaponicus* Koidz. に相当する。Fig. 2 はベルリン・ダーレムに保管されている須川長之助採集、富士山の果実ある標本を示す。

(3) *Rubus japonicus* VEITCH ex LINDL. et PAXT., Flow. Gard. 3: 163 (1853)

LINDLEY and PAXTON によって発表された VEITCH の標本はキュー王立植物園に保存されていると思われる。そこで、この植物のタイプ標本をまず *Rubus japonicus* として探がしたが見つかることができなかった。原記載によれば、この植物は日本原産で、無棘、葉はプラタナスのように大きく、切れこみ、鮮緑色で、花は白く、果実は黄色、ほとんど常緑、等々とあるので、カジイチゴとして目星をつけて、そのカバー中の標本を慎重に調べたが、それらしいものは見つからなかった。最後に、栽培植物中の未同定カバー中にカジイチゴ2点があり、両者とも Hort Veitch と書かれた VEITCH 採集のものであった。標本にその他のデータの記載はないが、HERBARIUM HOOKERIANUM 1867 の円形のスタンプがあり、これらがタイプ標本と考えられ、またこれらは重複標本と考えられるので、1枚を lectotype (Fig. 3) に、他を isolectotype (Fig. 4) に指定した。従って、LINDLEY and PAXTON が記載発表した VEITCH の *Rubus japonicus* はカジイチゴ *Rubus trifidus* THUNB. と同一とみなすべきである。

(4) *Rubus japonicus* MAXIM. ex O. KUNTZE., Method. Rub. 130, 133, 143, 155, & 156 (1879)

ソ連のレニングラードにある科学アカデミー・コマロフ研究所の標本室には約20点の日本産ゴヨウイチゴとヒメゴヨウイチゴの標本があるものと思われる。それら両種は、おそらく古い時代には、明確に区別されてなく、O. KUNTZE も混乱していたことがわかる。しかし、彼は随所にこの植物が剛毛のあることを記載しているので、私はタイプ標本を見てないが、記載からゴヨウイチゴと同定して間違いないだろうと考えている。東京大学の松村任三は1901年に日本産のキイチゴ属を整理した時に、日光、信州の駒ヶ岳、および白山からのゴヨウイチゴにこの学名をあてている。従って、O. KUNTZE の *Rubus japonicus* は、ゴヨウイチゴ *Rubus ikenoensis* Lévl. et Vant. に当ると推定される。

Summary

In earlier taxonomic works of the Japanese

Rosaceae, a specific epithet, *Rubus japonicus*, was used differently for different taxa by various western botanists of the 19th century, but later on the species named by LINNAEUS was turned out to be *Kerria japonica*, and two others were also correctly referred to *Rubus pseudojaponicus* and *R. ikenoensis*, respectively. However, the exact identity of only VEITCH's *Rubus japonicus* has so far remained unknown, i. e., whether or not to which taxon it should be referred.

In 1983, I had an opportunity to examine all Japanese *Rubus* collections deposited in Kew Herbarium, but the search for the type specimen of *Rubus japonicus* VEITCH ex LINDL. & PAXT. was in vain. According to VEITCH's original description, this plant native to Japan is characterized by large, fresh green, deeply dissected *Platanus*-like leaves lacking spines, and also white flowers and yellow fruits. It is also described as "evergreen". Considering all such characteristics of this *Rubus* plant named by VEITCH, it was assumed that this plant possesses many characters in common with *Rubus trifidus* THUNB. Among many unidentified specimens of cultivated *Rubus* plants, however, I happened to find two sheets of *Rubus trifidus* ("though not named") collected by VEITCH himself. These two sheets of specimens are possibly duplicates, and considering all circumstances, the two sheets should be selected now as the type specimen for *Rubus japonicus* sensu VEITCH ex LINDL. & PAXT., i. e., one sheet (Fig. 3) as lectotype, and another (Fig. 4) as isolectotype.

The nomenclatures of the four species described under the name of *Rubus japonicus* are therefore to be treated as follows:

- (1) *Rubus japonicus* LINN., Mant. 2: 245 (1767); LINN., Syst. Veg. ed. 13: 395 (1774); LINN. f., Suppl. Pl. Syst. Veget. 263 (1781); POIRET in LAMARCK, Encycl. Meth. Bot. 6: 249 (1804); THUNB., Diss. Rub. 4 (1813); JUEL, Pl. THUNBERG. 280 (1918); NAKAI, Misc. Pap. Reg. Jap. Pl. by THUNBERG 17 (1935)
Type: KLEINHOF's collection from Japan.
Holotype in LINN (Fig. 1), v. in hb.
= *Kerria japonica* (LINN.) DC. in Trans. Linn. Soc. 12: 157 (1817)
- (2) *Rubus japonicus* (MAXIM.) FOCKE in Abh.

- Nat. Ver. Bremen 4: 198 (1874); FOCKE in Biblioth. Bot. 17 (Heft 72): 26 (1910) — *Rubus triflorus* RICHARDS. β *japonicus* MAXIM. in Bull. Acad. Imp. Sci. St. Pétersb. 17: 149 (1872)
Type: TSCHONOSKI 1864 frøm Fuji-yama in Japan.
Holotype in LE, not seen. Isotype in B (Fig. 2), BM, K, & P, v. in hb.
= *Rubus pseudojaponicus* KOIDZ. in Bot. Mag. Tokyo 25: 74 (1911)
- (3) *Rubus japonicus* VEITCH ex LINDL. et PAXT., Flow. Gard. 3: 163 (1853)
Type: VEITCH, cultivated plant, origin from Japan.
- Lectotype (Fig. 3) and isolectotype (Fig. 4) in K, v. in hb.
= *Rubus trifidus* THUNB., Fl. Jap. 217 (1784)
- (4) *Rubus japonicus* MAXIM. ex O. KTZE., Method. Rub. 130, 133, 143, 155, & 156 (1879); MATSUMURA in Bot. Mag. Tokyo 15: 155 (1901); KOIDZUMI in Bot. Mag. Tokyo 25: 74 (1911); KOIZUMI in Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo 34: 109 (1913); MAKINO, MAKINO's New Illustr. Fl. Jap. 263 (1965)
Type: ? specimen from Japan in LE, not seen.
= *Rubus ikenoensis* LÉVL. et VANT. in Bull. Soc. Bot. Fr. 53: 549 (1906)
- (Received Apr. 10, 1984)

鳴橋直弘：台湾のヒメフユイチゴの学名

Naohiro NARUHASHI: On the Scientific Name of Hime-fuyuichigo or Yü-shan Raspberry from Taiwan

台湾の玉山（旧名新高山）をはじめ中央山脈の高所に分布し、イギリスではよく庭園に植栽され、我が国でも近年カバープランツとして栽培されているヒメフユイチゴ別名ニイタカイチゴは *Rubus calycinoides* HAYATA として日本、台湾、英国で知られている。

明治42年12月に中央山脈で森丑之助と加藤宗三によって採集された標本に早田文蔵は *Rubus calycinoides* の名前をつけた。その発表は *Icones Plantarum Formosanarum* 3巻88頁1913年である。

一方小泉源一は台湾を含む旧日本産のバラ科植物をまとめたとき、*R. calycinoides* HAYATA は未発表であった。彼はそれに記載をつけ、東京帝国大学理科大学紀要34巻154頁に発表したのは1913年であった。

学名には先取権があり、より早い有効名が正名となる。正確な出版の月日は不明であるが、我々はその出版物に記された年月日に頼るしかない。

小泉の発表は紀要の表紙から1913年10月28日である。早田の方は、その学名発表のある論文の序文では1913年3月31日に、Kakichi UCHIDA のことばは同年4月1日となっているが、その本の表紙に1913年12月25日と記されている。Taxonomic Literature 2巻108頁にも、早田の *Icones Plantarum Formosanarum* 3巻1-222頁は1913年12月25日となっている。

以上のことから、ヒメフユイチゴ(ニイタカイチゴ)の学名は、約2ヶ月早い小泉のものとなり、*R. calycinoides* HAYATA ex KOIDZUMI となる。しかし *calycinoides* という種小名 (epithet) は、O. KUNTZE が1879年にヒマラヤの植物で使用しているので、この名前は変更される必要がある。それで、早田と小泉両先生によってこの植物が世に出たことを記念して、種小名を *Hayata-Koidzumii* とした。

最後に、正基準標本を観察するのに便宜をはかっていただいた東京大学総合研究資料館の大場秀章氏に心より感謝いたします。

Rubus Hayata-Koidzumii NARUHASHI, nom. nov.

R. calycinoides HAYATA ex KOIDZUMI in Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo 34: 154, Oct. 28, 1913, non OK. 1879. Holotype: Mt. Morrison, U. MORI & S. KATO, Dec. 1909 (TI).

R. calycinoides HAYATA, Ic. Pl. Formos. 3: 88, Dec. 25, 1913, non OK. 1879. Holotype: Mt. Morrison, U. MORI & S. KATO, Dec. 1909 (TI).

Jap. name: Hime-fuyuichigo (KOIDZUMI 1913), Niitaka-itigo (KANEHIRA 1936)

Taiw. name: 玉山懸鈎子 (劉 1960)

Eng. name: Yü-shan Raspberry (LIU 1960)